

## INTERVIEW：インタビュー



アートディレクター

# 信藤 三雄 さん

今回は、誰もが一度は目にしたことがある数多くのヒット作品のCDジャケットのデザインを手掛けている信藤三雄さんです。渋谷系をはじめとするサブカルチャーの代名詞ともいえるCDのデザインやプロモーションビデオを作ってきた信藤さんにデザインの仕事を志したきっかけやお仕事ぶり、東京への思いなどについてお聞きしました。

(聞き手・構成：高橋 辰三，小峯 健介)

—— CDジャケットのデザインの道に進むきっかけは何だったのでしょうか。

ジャケットを手掛けたのは、アナログの時代ですからね。CDに入ったのは、ピチカート・ファイヴの『Bellissima!』あたりじゃないですかね。

—— (CDを取り出し) 初めて手掛けたCDジャケットが、この『Bellissima!』なんですね。

そうですね。ただこれも、アナログを作って、それのほかのアイテムとしてCDをデザインしたという感じですね。

—— タイトルもそうですけど、デザインもイタリアを意識されているんですかね。

そうかもしれない。当時、イタリアのデザインが載っているデザイン本があって、それにすごく影響されていた時代ではありましたね。

—— 外国からの影響というのは、どの辺にあたりますか。

たぶん昭和30年代の日本においては、やっぱりアメリカ文化の影響が圧倒的に強いから、何となくアメリカ経由ヨーロッパみたいな感じじゃないですかね。

—— 外国文化がお好きなのでしょうか。

そうですね。でも結局、日本ということになるんですけどね。やっぱりベーシックに僕が持っているデザインセンスは、日本が持つ伝統的な文化の中にあると思

いますけどね。

—— 子どものころはどうでしたか。

うちが江戸っ子の家で、植木や大工という、いわゆる江戸の職人の家でうちの親たちは育っていて、父方の曾おじいちゃんは日本橋で染物屋さんをやっていたんです。だから、その影響もたぶん強いんでしょうね。

その曾おじいちゃんは日本橋にいて、当時日本橋界隈で、今で言う買い上げでマンションをいっぱい建ててみたい計画があった。当時、うちの曾おじいちゃんがその計画の反対運動をやったんですって。それでそのときにフライヤーやビラを作ったんですって。だから、もしかして日本で初めてそういうアジビラみたいなのを作ったのかもねと言っていました。

—— 曾おじいさんが作られたビラを見たことはありますか。

見たことないですよ。見たいですよ。僕は、一時、脱原発運動でデザイナーたちを集めて、いろいろイベントをやっていたんですけど。

—— The Maskzのことですか。

そうですね。だからその辺は昔からの先祖の血、DNAかなと思ったことがありましたね。

—— 広い意味で広告にかかわるお仕事をされていて、そのような脱原発運動などをされることに躊躇は感じなかったですか。

もちろんありましたね。当然、主義主張が違う人たちはいるし、お上からもいい目で見られないだろうな、チェック入っているんだろうなというふうには思っていましたけど。

— The Maskzの具体的な活動はどのようなものでしょうか。

ライブとトークショーと一緒にやるみたいな感じですかね。

— そういった活動をされてみて感じたことはありますか。

すごく徒労感があったんです。どうしても脱原発という運動が大眾に広がっていかないんですよ。そこをどうしたらいいんだろうなということをずっと思っていて、今でも全然解決してないんですけど。でも僕たちThe Maskzがやってきたことは、後のSEALDsの運動というところにきつと影響を与えたんだろうなとは思っていますけどね。

— スクーターズを結成しバンド活動もされていましたが、音楽が切っても切り離せないという印象があります。

そうですね。

— 音楽家になりたいという、憧れはありましたか。

ありましたね。大学に入って、何となく音楽の好きなのが集まって、バンド活動みたいなことをしだして。そのうち就職の季節になって、みんな就職試験を受けに行き。ああ、みんな大人になっていくんだなと思ったけど、僕は普通に社会に出るのが嫌で、就職活動というのはまったくしてなくて。親からどうするのと言われていたりしていたんですけど、運よくというか、大学3年ぐらいからデザイン学校に通い出して、最初は夜間部だったんですけど、大学4年になって昼間の部に移って、ちょこっとデザインみたいなことをやりました。大学で広告研究会に入ったり、きつと興味はあったんでしょうね。でも自分がデザイナーになるとか、なれるとかということは、そのときは思ってなかったですけどね。

— 大学を卒業後、最初に就職したのはどういった会社

だったのでしょうか。

僕の父がやっている会社に無理やり入らされて。町工場に毛の生えたようなものですけどね。

— その後、デザイン系の仕事に行くまでどういう流れだったんですか。

うちの親父が絵描きをやっていたことがあるんですよ。だから家の中に親父が作ったちょこっとした粘土の彫像みたいなものとか絵とかが飾られていたんですよ。その影響があるのかな、今にして思えばね。

デザインの道に進んだのは、たまたま新聞の求人欄でデパートニュースという会社が編集者、記者募集みたいなのがあって、それで応募して、そうしたら運よく通ったんですよ。

— いわゆる業界新聞ですね。その新聞の記者として働いて、その中でデザインの仕事をされたのですか。

写真ですね。そのときに社内にデザインをやっている人たちがいて、初めて、こういう存在があるんだなというのを認識した。当時23歳ぐらいだと思えますね。

— デパートニュース社はどれぐらい勤められたんですか。

半年ぐらい。デパートニュースを辞めて、それで、ああ、やっぱりデザイナーの道というのがあるんだなと思って、それで音楽関係のデザインをやっている会社に転職しました。

— どういったお仕事をされていたんでしょうか。

1つは、ヤマハの関係の仕事で、ヤマハの楽譜の表紙とか。あとは、当時CBSソニーのジャケットはいわゆる邦楽ではなくて、洋楽のジャケットだったから、既にオリジナルがあって、それに対して帯と中の解説書、歌詞カードみたいなやつをデザインをやりましたね。

— 独立されたのはおいくつのときなんでしょうか。

30歳近くになってからですね。25～26歳のときに、世界的にロサンゼルスデザイナーたちが注目されている時代で、ウエストコーストがすごく注目された時代で。



『Bellissima!』  
ピチカート・ファイヴ  
提供：ソニー・ミュージックダイレクト



『ALARM à la mode』  
松任谷由実  
提供：EMI Records

音楽的にもイーグルスとか、あるいは浅井慎平さんのトロピカルな写真とか、そんな時代だったんですね。そんな中で、ミック・ハガティというデザイナーがいて、その人に憧れてデザイナーになろうと思って。

— CDジャケットデザインとかレコードデザインという方向性というのはミック・ハガティさんの影響があるのでしょうか。

あるでしょうね、きっと。まだCDはない時代ですけどね。

— いろいろなビッグアーティストたちの作品を作られていますけれども、自分の仕事の方向性を決定付けたという作品というのはありますか。

ピチカート・ファイヴの『アクション・ペインティング』は、自分がずっとやりたいと思っていたいろいろなことが初めて実現できたものかもしれないですね。

ユーミン（松任谷由実）の『ALARM à la mode』（アラーム・ア・ラ・モード）というアルバムがあって、それも僕の中では、自分のデザインがやっと何か形になったときだと思いますね。

— CDジャケットをデザインするにあたっては、アーティストの希望を形にするのですか。それとも、作品を聴いてからご自身のイメージを膨らませるのですか。

両方ですね。

— 楽曲が出来上がってからデザインに入るのか、それともまだ楽曲が出来上がる前のコンセプトぐらいからデザインを作っていくのでしょうか。

ほとんどは、音が全部仕上がっていて、それでジャケットを頼まれるというケースが8割ぐらいです。

— 音が仕上がってない段階で作るとするのは、どんな音楽ができるかをイメージしながら作るのでしょうか。

どうでしょうね。でも、すごい音楽は聴く前に分かるというか、僕の中ではそんな感じですけどね。もう1つは、新人じゃないとすると、前の音楽を聴けば、だいたいどういう志向性のミュージシャンなのか、どういうビジュアルが好きなのか、みたいなことは予想できるじゃないですか。

— 最近では書道もされているとうかがいました。

そうですね。書道といえるかどうか分からないんですけどね。

— CDジャケットの作品の中に、例えばタイトルをそのように書でやるとか、そういった必要から始めたんですか。

そうですね。でもきっかけはやっぱりピチカートだと思う。ピチカートで僕は手書きで、手書きの文字をばーっと入れるみたいな手法をいくつかやっているんですよ。

— この『学校へ行こう』のCDジャケットとかですか。

そうですね。あとは『女性上位時代』のポスターとか。

— いろいろな活動をされているんですけど、これからこれをやってみたい、挑戦したいというものはありますか。

やっぱり書というのはもっとやっていきたいなと思うし、書と音楽と合体したようなイベントとかですかね。書は、自分を表現するのに一番いい材料だと思いますね。

— 映画監督もされていますが、最初に作られたのが『代官山物語』という作品でしょうか。

そうですね。それも最初ビデオで発売しようという





ベーシックに僕が持っているデザインセンスは、日本が持つ伝統的な文化の中にあると思います。うちが江戸っ子で、だから、その影響もたぶん強いんでしょうね。

信藤三雄

計画で、それで、日本ヘラルドが出資してくれて、出来上がったなら、じゃあ、これは映画館で上映しませんか、みたいなことがあって。

— その後の作品が麻布の『男女7人蕎麦物語』ですね。これも東京の町を舞台にしているのですが、どのようなテーマがあったのでしょうか。

ちょうどそのとき麻布に事務所があったので。テーマは何でしょうね(笑)。まあ、たまたま麻布十番によく行くそば屋があって、そこのそば屋がインテリアも何かいい感じなので、ここで何か撮れないかなと思って。ちょうどそのときに、ビクターのディレクターで好き者がいて、『SOB-A-MBIENT』(ソバアンビエント)というコンピレーションアルバムを出しましょうというのもやって。そのときに小西康陽君とかも楽曲提供していて、それで、僕も楽曲提供したんですよ。それは完璧にミュージシャンとしてやったんですけど。その曲が我ながらよくできたの。

— 映画『男はソレを我慢できない』はコメディ映画ですが、男女問題、社会問題もあってとても有名な作品ですが、これを作られたきっかけはどのようなものですか。

寅さんが亡くなって、何かやっぱりああいう、毎年同じようなストーリーだけど、変わらずあるという映画っていいなと思ったわけですよ。

— 『男はつらいよ』シリーズのパロディーになっているのですね。

そうですね。『男はつらいよ』的なものを僕が作ったらどうなんだろうなと思って、その寅さん役として竹中直人さんがいいなと思って。たまたま何か高橋幸宏さん主催のボウリング大会というのがあって、そのと

きに竹中さんと同席して、そのときに思い切って、下北の寅さんをやりたいんですけど、みたいな話をして。そうしたら何か、わりと快諾的な感じで、おっ、これはいけるかもと思っていたら、何かそれにお金を出してくれる人も現れて。竹中さんから知り合いの役者さんに声を掛けてもらって、それで実現したんですね。

— 『男はソレを我慢できない』は、作品の舞台は2006年ですけど、ラジカセを担いで下北沢に帰ってくるんですよ。ああいう作品を、今見直してみると、そういえば下北沢の駅ってこうだったんだというのを思い出して街の変化を感じます。

いつの時代でも何かね、古いものが壊されて新しいものになっていくんだけどね。いつも悲しいなと思う。

— 話は変わりますが、東京弁護士会のイメージを何かデザインするとしたらどんな感じでしょうか(笑)。

どうだろう、難しい質問ですね。何となく、お医者さんと似たような職種だなというふうには、あいまいには思っていますけどね。

— なるほど。求める弁護士像はありますか。

できるだけ簡単にいろいろなことを相談できる弁護士さんがいたらいいなというふうには思います。日常でいろいろありますものね(笑)。

#### プロフィール しんどう・みつお

アートディレクター、映像ディレクター、フォトグラファー、書道家、演出家、空間プロデューサー。松任谷由実、ピチカート・ファイヴ、Mr.Children、MISIA、宇多田ヒカルなど、これまで手掛けたレコード&CDジャケット数は約1000枚。その活躍はグラフィックデザインにとどまらず、数多くのアーティストのプロモーションビデオを手掛けるほか、映画監督としても短編、長編で3本の映画作品を発表している。